

第3部 現代社会研究

司会 同志社大学人文科学研究所准教授 林 田 秀 樹

司会 それでは第3部を始めさせていただきます。部門研究に多様な研究応募がある「現代社会研究」の分野を代表して同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の松久玲子教授にご講演をいただき、メキシコ社会人類学高等研究所の浅倉寛子教授よりコメントをいただきます。

松久先生は、ご着任の1990年代初頭より、第12、14、18、19期と計4期にわたり、人文研で部門研究会を組織してこられました。研究会ではラテンアメリカの地域研究、特に同地域のジェンダー問題や労働問題に関連したテーマで研究活動を活発に展開され、研究所機関誌の『社会科学』に多数の論考を寄稿されています。加えて、同誌上で研究会参加者の方々とともに2004、2016、2019年の3次にわたり、特集を組んでおられます。さらに「人文科学研究所研究叢書」も、同様に研究会参加者の方々とともに2冊刊行され、2冊目は人文科学研究所の研究叢書の最新のものです。

本日は、長年にわたり人文研の部門研究会で展開してこられた研究活動と積上げてこられた研究成果に関して「地域研究拠点としての部門研究－同志社大学のラテンアメリカ研究」と題して、ご講演をいただきます。よろしくお願い致します。

地域研究拠点としての部門研究

——同志社大学のラテンアメリカ研究——

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授

松久玲子

75周年を迎える人文研のシンポジウムに講演者として参加させていただくことは、大変光栄なことと思っています。私ごとではありますが、今年度で同志社大学を退職します。同志社大学への入社以来、共同研究の場として人文研の部門研究に参加してきましたので、自分自身の研究歴と人文研の研究活動が重なって感慨深いものがあります。

講演依頼を受け、過去の記録を探してみたところ、1994年に出版された『同志社大学人文科学研究所50年史』に自分の投稿を見つけました。「人文研の共同研究と学際科目」というコラムを書いていました。グローバル地域文化学部が6年前に立ち上がり、その前身である同志社大学の語学教育を担っていた言語文化教育研究センターに所属していた当時のものです。スペイン語を教えていたのですが、その背景となる文化や地域研究（エリア・スタディーズ）を結びつけるために、講義科目として人文研の共同研究メンバーで学際科目を担当させていただいた経験を書いていました。言語文化教育研究センターは語学を中心に学生たちに教える組織だったこともあり、科目を設置することができない中で外国語大学ではない総合大学で「ラテンアメリカ研究」の場をどのようにつくっていったらいいか、それをどう確保するかは私に

とって大きな問題であり、その頃から「ラテンアメリカ研究を同志社大学でできる場がくれたらいいな」と思っていました。またそれが私の夢でもありました。

人文科学研究所の部門研究は、3年ごとに同志社全学の教員に、研究会を立ち上げる募集を行います。人文研に所属する教員以外にも他学部やセンターの人間も参加することができるシステムです。私の最初の部門研究への参加は、1992年～95年、第11期研究会の部門研究で「近代市民社会と周辺システムに関する比較社会経済史」でした。12期研究会では「社会変動と周縁性の総合的研究－階層・ジェンダー・人種」の部門研究に参加、14期は「社会運動・政策決定・ジェンダーの国際比較」の代表を務めました。私は、その中で「ラテンアメリカにおけるフェミニズム運動」を中心的テーマとして研究してきたわけです。その後も継続的にさまざまな部門研究に参加させていただきました。18、19期ではラテンアメリカの地域研究に関する部門研究会の代表となり、20期にはそのメンバーとして参加しております。数えますと20年以上にわたり、人文研の研究会に参加してきたことになります。その共同研究の経験を踏まえ、多様な部門研究の一つの例として人文研の部門研究をベースにした「ラテンアメリカの地域研究」についてお話したいと思います。

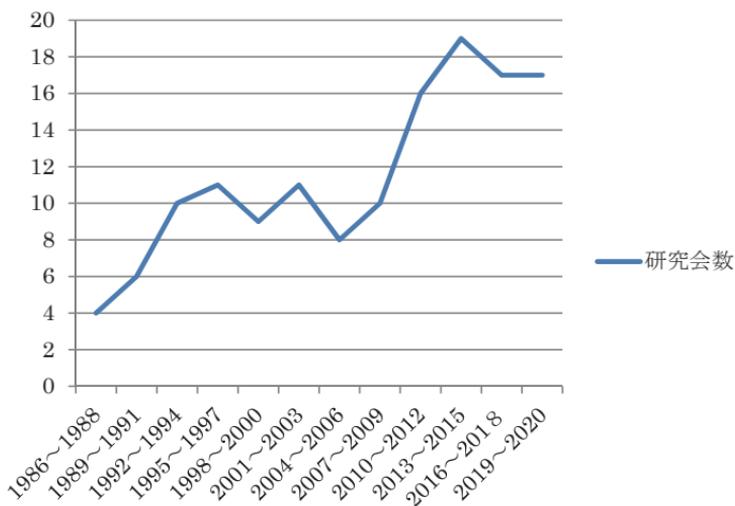
1 現代社会分野の部門研究の特徴

人文研は「キリスト教社会問題」と「京都・近代地域研究」と

いう二つの伝統的、中心的な研究、それ以外にさまざまな社会科学系の部門研究会に門戸を開いてきました。これらの研究会は今「現代社会研究」の範疇に入っているものですが、実に多様な研究会から構成されています。部門研究会全体の数の推移をみますと、1990年までは5つ前後が、第11期の1992年以降、10前後に増えています。第17期の2010年以降は20に手が届く部門研究がなされています（表1）。実に多様な研究会が行なわれていることがわかります。

配布された資料集の中に各期の部門研究会のタイトルが入っています。これらの部門研究を簡単にみてみると、主要なものとして「市場と商品」、ランドマーク商品という商学関係のもの、経

表1 人文研における部門研究数の推移（1986年～2020年）



済学関係の「グローバルな経済システム」、トピックスとして「第三世界」「周辺研究」「行政改革」「ガバナンス」「トランスナショナル」「越境」とか、現在、世界中で問題になっている「移民」の問題、「植民地主義」、「近代市民社会」、その他にも多様なテーマが出ております。これらの全部についてお話はできませんので「現代社会研究」の中でも国際的な比較研究及びエリア・スタディーズなど、私が関心をもって参加したものを中心に見てみたいと思います。

第9、10期の頃は5つ前後の研究会で、キーワードとして「南北問題」「第三世界の発展構造」「越境的世界観の比較研究」が見られます。部門研究が10くらいに増えてきた10期以降から「多民族社会」「グローバリゼーション」「周辺」「世界システム」「階層社会」「ジェンダー」「世界経済」「文化の中心と周縁」「越境」、さらに新しくなると「グローバル化」「移民」「トランスナショナルリズム」「大衆消費社会」「植民地主義」「越境教育」、さらに17期から研究会が増えて、現在は17の研究会があります。「越境」というキーワードや「植民地主義」「グローバル・ヒストリー」など、さまざまな用語が並んでいます。研究会のタイトルから見ると「グローバリゼーション」に伴う 이슈が採り入れられていることが特徴的であると思います。グローバリゼーションは抽象的なものではなく、それは国家や地域の中で実現され、動いている「空間」である地域として、アジア、東アジア、韓国、北朝鮮、ヨーロッパではドイツ、イギリス、ヨーロッパ共同体、ラテンアメリカ、アフリカなどの地域が見られます。「現代社会研究」

では、こうした地域を視野に入れた広い国際的比較研究が行なわれています。人文研を拠点として同志社大学の学部を超えた人的つながりによって、学際的で多様な研究がされているというのが「地域研究」やグローバル化に関して展開されている「現代社会研究」の特徴であると思います。一言でいえば、「現代社会研究」に分類される部門研究の特徴は、「学際性」「国際比較」「地域研究（エリア・スタディーズ）」といえるのではないかと思います。

2 「現代社会研究」におけるラテンアメリカ地域研究

先ほども申しましたように、現在の第20期の部門研究では17の研究会があります。ラテンアメリカの地域研究もその一つで、今年度から部門研究として「ポスト新自由主義時代におけるラテンアメリカの人権レジーム」が発足しています。その前身として18、19期に「ラテンアメリカにおける国際労働移動の比較研究」という部門研究を行いました。この研究会では関西圏の若手研究者、東京からラテンアメリカ研究者を招き、海外の研究機関に籍をおく研究者を招聘して研究会を開催してきました。

3期にわたり「ラテンアメリカ」に関する研究会が行なわれていることは、私の入社当時と比べると大変感慨深いものがあります。入社当時はラテンアメリカ、スペイン語圏文化・社会に対する関心は低く、「スペイン語圏で語るべきものはあるのか？」と真面目に質問されたこともありました。ラテンアメリカは33カ国あり、その多様性は未だに見過ごされていて「スペインとラテ

ンアメリカ」「ヨーロッパと第三世界」という二項対立的な区分で今も語られています。ヨーロッパは、今は EU も研究対象になっていますが、それ以前はフランス、ドイツ、イギリス研究として独立することがあたりまえのように語られていました。それに対して 33 もあるラテンアメリカ諸国は「ラテンアメリカ」という一括りになってしまっています。入社当時から、「アカデミズムにおける植民地主義」とでもいうものがまだ根強くあったのではないかと思います。

25 年前、同志社大学に入社した時、大学には学部に分属する 3、4 人のラテンアメリカ研究者がおりましたが、たまに全国のラテンアメリカ学会で顔を合わせる程度で、共同で「ラテンアメリカ地域研究」を展開する場はほとんどありませんでした。「ラテンアメリカ研究」という分野すら、その当時は認知されていませんでした。「エリア・スタディーズ」が認知されるようになったのは比較的最近であるかと思います。「南北問題」または「周縁研究」の一部として、または「第三世界研究」の一部としてラテンアメリカ研究者が参加することはあっても、ラテンアメリカ問題をテーマとする研究会を構成することは、当時では難しかったです。

人文研で 3 期にわたり、ラテンアメリカに関連する部門研究会を継続したことは同志社大学に「ラテンアメリカ地域研究」を根付かせる上で大きな力になったと思います。この講演も「同志社におけるラテンアメリカ研究」という大きなタイトルにしていますが、入社当時の私にとっては、どこで研究したらいいのかとい

うところがあり、ラテンアメリカ研究者としてのアイデンティティをどう実現していくかが一つの私の課題であったようにも思います。

人文研によって安定した研究の場と研究費支援を与えられたことは同志社大学の教員を中心として関西圏の若手研究者を研究メンバーに加えるだけではなく、東京の若手研究者、ラテンアメリカの研究者を招聘することが可能になりました。メキシコ社会人類学高等研究所（CIESAS）、メキシコ首都大学、アルゼンチン大学、メキシコ大学院大学（El Colegio de México）から、さまざまな研究者の方々と継続的な交流の場をもてたのも人文研の研究会があったおかげだと思っています。また紀要や出版補助によって発表の場を提供されたことは、実際に何をしているのか、実績をきちんと示していく上でも、ありがたいことでした。第18期の部門研究「ラテンアメリカの国際労働移動の比較研究」ではラテンアメリカの域内、域外の移民を対象とした研究を行いました。「アメリカ大陸における移民研究」は南のメキシコや中米からアメリカ合衆国への移民が、現在でもトランプ大統領が壁を築くと言っていますが、「南」から「北」へ、第三世界であるラテンアメリカから工業化された先進国であるアメリカ合衆国への移動が大きく取り上げられています。しかしラテンアメリカ全体を見ますと、「南」から「北」への移民と同時に「南」から「南」への移民、第三世界間で移動するラテンアメリカの域内移民が半分以上を占めます。また移民の多くは男性労働者と考えられてきました。しかし、女性の単独移民が増加しています。はじめに男性が

移民し、その妻たちが家族統合のために移民していくと、かつては考えられていましたが、そうではありません。女性の単独移民もあります。送りだし国や受け入れ国の労働市場によって移民そのものがジェンダー化されています。たとえばラテンアメリカの南米、コロンビアから、北のアメリカ合衆国よりは大西洋を超えてスペインへの移民が多い。スペインは家事労働者の需要が多く、そこで女性移民の方が男性移民よりも多くなるという興味深い状況もあります。アメリカ合衆国中心ではなく、メキシコ、コスタリカ、エルサルバドル、ホンジュラス、アルゼンチン、コロンビア、スペイン地域を対象にして比較研究をしてきました。

多地域にわたる比較研究をすることは、さまざまな地域を担当する研究者の存在が不可欠です。ラテンアメリカ研究においては東高西低で東京を中心としてかなり若手の研究者がいるのですが、関西圏では集めるのがなかなか難しい。その中で、人文研からさまざまな研究支援をいただくことで旅費を得て調査に行かせていただき、研究会を運営することができました。18期の部門研究会を基礎に、日本学術振興会と文部科学省による科学研究費補助金科研（B）に応募し、研究費を獲得することができました。「ラテンアメリカの国際労働移動によるジェンダー・エスニシティによる国際分業の変容」のタイトルで応募して競争資金を獲得しました。初回の応募で、補助金を得るのは難しいというのが一般的な認識ですが、1回で獲得することができました。これは3年間にわたる人文研での実績があったこと、研究分担者として豊富な人材を配置できたことも一つの要因だったと思います。科研に

よる潤沢な競争資金を得たことで研究会メンバーに調査資金を提供でき、そのことによって研究成果を確保することができました。第18期で『社会科学』に特集を組み、同時に報告書と本を出版することができました。この一連の結果も研究会の継続があったからこそであると思っています。

また、2018年からは同志社の中で「ラテンアメリカ研究センター」を発足させることができました。全国の大学で研究センターをもっていくところは多くありません。外国語大学では、関西で京都外国語大学、関西外国語大学が研究センターをもっていますが、総合大学では東大のラテンアメリカ研究センター、上智のイベロアメリカ研究所、立教大学のラテンアメリカ研究センターと数少ないと思います。そうした中、同志社大学でラテンアメリカ研究をしていることを目に見える形で示すことができたことが、私としては来年3月に退職する最後の仕事として、うれしく感じています。人文研によって安定した研究の場、経済的な支援、研究費をえられたことによって研究を継続して基礎的研究が可能になった結果だと感じています。研究会は、関西圏の若いラテンアメリカ研究者がいっしょに研究を行なう場所となっています。同志社大学の研究者だけでなく、ラテンアメリカ研究に関心をもつ関西圏の研究者たちを嘱託研究員として人文研は迎え入れることができるシステムになっていますので、それも大きな力となっています。また、メキシコを中心として、ラテンアメリカ諸国の国際交流をする場ともなっています。研究においても人材の確保が重要ですが、それには招聘、調査のために資金的裏付け

が欠かせないものです。同志社大学では大学レベルでの共同研究の拠点化の動きがあります。外部からの補助金をとったところへ優先的に予算措置がなされている点は人文研とは少し違うかなと感じています。長期的な視野に立ち、研究拠点の芽を育てていく意味では、多様なテーマを研究する場になっている人文研の果たしている役割は大きいというのが私の実感です。

3 人文研の今後に期待すること

人文研の果たしている役割は、ラテンアメリカ地域研究だけではなく、他の部門研究にも同じようなことがいえるのではないかと思います。同志社の中でキリスト教文化研究、人文研の伝統的な領域以外のもの、各学部の既存の学問体系にとって新しいもの、そうした研究テーマに沿って、部門研究として全学的に研究員を募集することができる。研究会を立ち上げるにあたっては人文研でオーソライズしていますが、そういう機会を与えていただくことは、とても大きなことだと思います。ラテンアメリカ研究は、その一つに過ぎません。他の例として、「코리아研究センター」もあります。こちらも人文研の部門研究と連携しながら研究を進めていると伺っています。ASEAN 研究も同志社における地域研究の一つです。同志社大学は「アメリカ研究所」という伝統ある研究所があります。また、ヨーロッパ研究は歴史的に多くの蓄積がありますが、それと比べて同志社大学にとっては比較的新しい研究分野に人文研は部門研究として機会を与えて研究の場を確保

してくださっています。昨年、ラテンアメリカ研究センターができたばかりで、まだ小さな研究の芽にすぎず、これからが重要ですが、そういう芽を植えることができた背景には組織的な支援が欠かせなかったと思います。同時に人文研のもつ多様な研究テーマを受け入れる包容力の大きさが、同志社大学のアカデミズムの懐の深さにつながっていくのではないかと考えています。

人文研は社会科学、人文科学の分野においてテーマを固定せず、研究者の自主性にまかせつつ、多様なテーマを比較的長いスパンで受け入れ、研究の場と経済的基盤を与えてきました。このことは、同志社大学の中で新たな共同研究の芽を育て、研究分野を拡大する上で重要なことだと思います。叢書、ブックレット、紀要で発表の場を確保されていることも重要なことです。現在、大学の中では研究者の連携、競争的資金の獲得、国際的研究交流が大学にとって大変重要な課題になっています。そうした活動が花開くためには短絡的な実績主義ではなく、ある程度、余裕のある時間と経済的支援が必要であり、人文研によるこれまでの活動が、そうした研究が発展する上で大きな役割を果たしてきたこと、これからもそういう意味で、さまざまな可能性に対して門戸を開いていただくことをお願いしたいと思います。今後の人文研の発展を祈願しております。

司会 松久先生、ありがとうございます。私も東南アジア地域、ASEAN 加盟の東南アジア諸国の政治経済に関連したテーマで部門研究をさせていただいていますが、ただ今のお話で「現代社会

研究」の分野において地域研究が担う大切な役割を改めて認識させていただきました。外部資金については、「キリスト教社会問題研究」や「京都地域研究」の分野でも獲得されている研究会は少なからずあります。人文研での研究活動の積み重ねが、外部からの高い評価を生んでいることの表れではないかと思います。

引き続き、松久先生と長年のご親交があり、人文研の部門研究会でも活動をともにされてきましたメキシコ社会人類学高等研究所教授の浅倉寛子先生からコメントをいただきます。よろしくお願ひ致します。

コメント

メキシコ社会人類学高等研究所教授 浅倉 寛子

今日は人文科学研究所 75 周年記念シンポジウムでコメンテーターを引き受けさせていただきました。来年 3 月をもって退職される松久玲子先生のたっぺのご依頼ということで、私の個人的経験から人文研の国際交流に焦点を絞って話をしていきたいと思ひます。私と同志社大学人文研との関係を語るにあたって松久先生との出会いを抜きにして語ることはできませんので、私的なことになりますが、お話ししたいと思ひます。

私が最初に松久先生にお会いしたのは、メキシコで、1998 年のことです。松久先生は、1 年間の在外研究の一環として、エル・コレヒオ・デ・メヒコ、メキシコの大学院大学女性学学際研究セ

ンターで、サマースクールに通っておられました。6月か7月のことだったと思いますが、私は30歳前で大学院に入る直前でした。スペイン語もおぼつかなく、日本語でも読んだことがない社会学や政治学の書籍をスペイン語で読むことに関して、不安でいっぱいの時でした。将来も、研究者を目指すのかもわからない状態の時、松久先生は、小さいお子さまをお二人つれてメキシコの地で研究をされていました。その姿を見て勇気づけられ、やればできるという感想をもったことを今、思い出します。

私が研究者への一步を踏み始めた時、松久先生はメキシコを中心としたラテンアメリカ研究者とのネットワークを1年間の在外研究の期間でつくりあげておられました。エル・コレヒオ・デ・メヒコの中心的なフェミニスト研究者や、同大学のアジアアフリカ研究センターに勤務されている日本人研究者を巻き込み、『メキシコの女たちの声－メキシコ・フェミニズム運動資料集』の編纂の準備を進められ、2002年に本を發表された業績をもっておられます。その後、メキシコ、ラテンアメリカだけでなく、日本でのラテンアメリカ研究者とのネットワークを広げ、その中に私も入れていただいたのですが、その成果として『国境を越えるラテンアメリカの女性たち』を2019年に出版されました。その本には私も参加させていただきました。総合研究という、同志社人文研設立の時から姿勢・指針を、松久先生はラテンアメリカの比較研究を通してやっておられました。先生が主催・統括されてきた部門研究会には、いろいろな分野の方たちが参加されています。政治学、経済学、社会学、人類学、歴史学の分野の方たちが参加

し、研究会で発表・意見交換して、各自の研究を論文にまとめ、先ほどご紹介した『国境を越えるラテンアメリカの女性たち』に掲載させていただいています。その他にも、松久先生は、同志社大学機関誌の一つである『社会科学』に特集号を組んで、2冊、出版されています。このふたつの出版物の中に私も参加させていただきましたが、個人的にも研究会を通してみなさんと意見交換し、その成果をこういう形で発表できたことをとても感謝しています。私は20年以上メキシコに住んでいますが、日本のラテンアメリカ研究者が集まる研究会で発表する機会を得たことで、外からの視点で意見をもらえる貴重な場を提供していただくことができました。

人文研が部門研究で、潤沢な資金を研究者たちに与えてくれる。この機関があつてこそ、メキシコ、ラテンアメリカ諸国の研究者たちとの国際交流が成り立ってきたと思います。メキシコからは、メキシコ首都大学のマルタ・トーレス・ファルコン先生を招聘して講演させていただいています。国立人類学歴史学学院のフリア・トゥニョン教授、エル・コレヒオ・デ・メヒコ社会学センターのセンター長のカリン・ティナットも、こちらで講演しています。私が所属する社会人類学高等研究所からは、カルメン・フェルナンデスが一昨年夏、講演させていただいています。メキシコ人でプエブラ出身のイレーネ・パラも研究員として同志社大学グローバル・スタディーズ研究科の大学院生として在籍し、学ばせていただいています。また彼女は、社会人類学高等研究所ゴルフ支部に数ヶ月間滞在し、在外研究をしています。このよう

に、同志社大学の人文研とメキシコとは深い関係にあります。私の所属する機関とは2013年、二国間学術協定を結び、正式に両機関の関係性を持ち、交流を深めてきています。私も松久先生が立ち上げた18、19期の部門研究会に継続的に参加させていただき、科研費と部門研究会の助成金のおかげで6年間、毎年、日本に来て、松久先生の部門研究会で中間発表をさせていただいたの、長い時間をかけて私自身も、人文研に育てていただいたという感想をもっています。

最後に、「現代社会研究」に位置する「ラテンアメリカ研究」の特徴という視点から、お話ししたいと思います。「ラテンアメリカ研究センター」ができたことで、「ラテンアメリカ研究」は人文研の中でも中心的役割を担っていくかと思いますが、一番の特徴は、グローバリゼーションが進行する現代社会の中で、ラテンアメリカの個々の国々、地域、部落、社会グループを研究することにより、ローカルで起こる現象に焦点をあててきた、ということにあるのではないかと思います。また世界的な問題となっているテーマ、「移動」「移民」「越境」の問題を「ジェンダー」の視点から読み解く努力をしてきたことは、特筆に値するのではないのでしょうか。「移動」をテーマにするラテンアメリカ研究者は多くいますが、「ジェンダー」の視点から行なう人は、日本では特に少ないといえます。松久先生は先見の明をもっておられ、日本のラテンアメリカ研究の中で、そういう分野を切り開いてきたといえるのではないのでしょうか。

関西圏に限らず、関東、海外からの研究者を招聘して若手の研

究者たちに機会を与える、それは松久先生が長年やってこられたことですが、同志社大学の人文研は、研究者に対して研究ができる資金面やインフラストラクチャーといった確固とした基盤を持っています。発展途上国、第三諸国からくる研究者にとって、同志社大学の建物自体がすばらしいもので、そこで発表の場、ディスカッションの場を、資金とともに提供してくださる同志社大学人文研の懐の広さがあったからこそ、人文研の「ラテンアメリカ研究部門」研究で、国際交流が発展・継続してきたのではないかと考えています。人文研にはこれからも今までのスタンスを保ちながら、同志社大学に所属する研究者だけでなく、国内外の共同研究者が、息の長い研究ができる場を提供し続けていただけたらと願っています。これで私のコメントを終わらせていただきます。

司会 ありがとうございます。ご紹介が遅れましたが、朝倉先生は本日の登壇者のなかではただお一人、同志社大学以外の研究機関に籍を置かれている方です。先生のお話からは、学外の研究者からも親しまれている人文研、頼りにされている人文研であることを再認識致しました。